郡山
新百人一句
富士百句
移徙抄

拔萃

合冊

中村俊定文庫
文庫 18
44

元狩欽堂蔵 今村樹園付ト云

巨保理射麝 全一 抜萃

大半紙本十四丁十一行立也 丁附ニ ひの一 ひの五十一ナト記セリ

作者不記 巻末ニ正保三年の月日抜元ヲシルセリ 宮ハ大和郡山池田正式作ナリ

ふれる都に誹諧撰集せ企あらし作風ふくり其数ふし入ゆくぶ此道よりそ伝おもい出る面し先よくもあり久き発句つゝうゆつくるえ伝ゆんる先達の秀逸の作をえるゝい具其芳跡をるのゞ色んゞあよ俳る誹諧の集ゞとうゝあのをえ伝る中に毛吹草とゝる集ハ古ゞ連歌誹諧のゞ左別ゝと云其一の巻ハいづゝ連歌ゝ伝ゝ序ゝゝ貫之が古今ゝ序の躰を学ゝるゝ中昔ハ熟簟の躰是ハ加麻久左比の体とゝ伝品ゝをゝゝ口詞の善悪をさゞあ病雖まてと云ゝ伝ゝ又和哥髄脳ゝも超ゝ次の巻ハ四季の

中村保定文庫

詞をさへ記して六十余國は土産までも記せるは是迄我朝の
禹貢の文もゆつへくもれあるを空おそろしくもあれ
伝れいるて廣輿の記ともいつ西一誠に此集の蒙疑
千載の龜鑑とおもふて作者は心おろかなる伝をも耳来都
の誹諧のと世を鳴る人こは太数の音はつる負德翁女乃
ふはまことをもて離れ反ふとして者翁きゆめし
よいは及つとこは人こをとをして此集をえらみくるはげふ
もそれは心の大文字を反てい伝れいるはまはは生はは
況伝をもてもゆれふぐれん知る人こは云つ一ふ
発句の一句も伝こうまつとは是で具体ふど弁く知ふ
はもも伝こうしたこれられてはは師みて伝れ心をとて

是伝を中に御りふこうを何この伝るは元来是ふる仏の
くを故をもおりは伝ふぐふを味をとこをあるだして
具体を学ひは伝ふはいふよりくををふくを伝ふ
ざこんをさふこは其作者はあるてもを此不審をはをは
伝をくををもれども著てをりかくをおりは備ふる事みも
あるは又むをざ多を不審を多て伝ふむは遠ふ一大のかをを
をやらんをざとくふるんも嗚呼をを伝ふへれををは此道の
堤能ふを詞あをふ也をを朱子の四書集註ふは
程子の説をを是をとを范子の心を取用られたるは
ふれは此不審をををけ多をびてんを何のををうは伝ふん
ふ又人の是をべをふ
ふをはんをうちをを己の心の迷ひを

解んもあるまじ此ケ條の中にあるは不審の所
付くべき點を合て除くべきなり所をいたす
一 発句の差頭
学ぶも教機嫌ふるうるの事
いくらもある発句の中に此ケ機嫌とゝ取るをとれ
ども卿不審の付るつもり草に世よもあるべからん人を
先機嫌をとる事と有り注に機嫌の二字は佛書
より出るもあるよしつゝを尋ぬる人行れば中阿含
経に頻知機嫌と云文あり是を愚る心より簡侍
る佛書に限る機嫌を気ざしみてはいまと物の多明あら
ん義也機嫌と連属しくらい佛書にあるは嫌嫌

此ナラビ一字下ケ書ヘカリシナリ

ふて物めくとゝ心あるべき也の當も教樣嫌也とゝ
春に為て人の心は申に及ばず當も教樣を発すべき気ざし
にもいくらよと云心ゆゝはるゝ此発句を数度吟じ
昨日まで熟居をもし當も今日の事に立出る教を
詠吟するを学ぶ端的のやうに学ぶるさたにもざし
ゆゝ及ぶべくゆゝ若又いまと聞して教樣を心あるべ
教樣嫌也と落着しらぬ詞あるゝ付ても元誹諧
の上はもゝ一部の差頭の為体は君子の万民の上を居て
其盛德をほどこしたがめる心正詞直ようゝ而おゝ人
もゝ発おゝ教及ばつゝ但今の人世世もゝ誹諧
の祖始体ゝ也ゝ名聞を

のこと事とて或いはづさにちりぢりて市をさく利に
あげあるいはづさに他の句を付墨一さくの賂を得ん
るとまちうぶんにがふも仕ん是まてのネ富いうく
りもるまつみや

此間十ケ條ほどの批言あるべき當否をわきまへ

一若菜の発句に

七種とえらべる六の花鄙にて

作意珍重にして高雅耳ふ甘心をれ仕ん程に
ちりも道理ず半杯奔宗養の名句をて仕られい

七種をりまと六の花鄙にあり故人の
連歌の名句をかくれとなく少云替てつうまんさい

ちりもるもふどの句集仕ずんやふるい宗養の句に
等類ふんべるに心詞おりいさうう仕ん仕ん
らふ詞と極をもおもへるやさいあるまじ仕れば中ょ及
んば是ら第一ネ審ふ仕る連歌俳諧の差別
ふるとと何と学ぶい仕ん仕うう紀ふるとに仕れと
古今序ふもあるれもむるまに仕ん仕ん
ふるとふ中ふい古人のおもひ迫切ふいいんや
言世の狂句躰ふるも其人ふあんべーさふるれと
掟ふるいいさこいあるけふくや仕ん大方毛吹草
ちるるんにちるるるによるもあるるるるる洛中とて
ゆくく近國遠国とるるる近物とるるの人ょ捨こるるい何と

と名物を名をつけてでるれ俳諧仲のさびしいあるう
うし又撰入はなる句も心のうるしあやはくてん
魚目驢珠のたとへのやうに見て付るいろ〳〵已り愚なる心の
ありさまとあげつらひ行る今又そこひあつめは貞徳翁
は元来ものしりのうちに名あるうれい久しく年いはうるれい
俳諧解ふり降るくつつてあるうとくらそこて付れ
其撰ふ乱さるんは降るくも付るん祈ふくも僕がつど
うあ此ものあれ有餘るをけづるこて捨て只一句
其数ふ入行るんい身の幸ありばやとそうるうるれ
うをまるあつあるこれるふ入行るい
人ふ此あ取ををのうとうるつめて名て面目を

まふを俳諧ふは思ふ捨くふうやせふ作るやるんれ
此るるにあつるをもうびは此道を秘事のあるとも考ば
うびるるあ心を経るるるるるをあうあるをさ〳〵なし
粗粕瓶のうれを求得てつぎもし秘ものまつびとおもする
はもれらん人のまはさられるるいるうむるれども
をうるうるさふはうるるるるれい被墨石を納
しにおるるんを
俳諧のふるてふんくくえるを
ちやうくもしとこけばうのもし
口のさうるん罪のれうるくや大笑こ
るるるるん毛吹草ふやるんの御雑一ケ条もあるよい

不存ハ世ニ[illegible]れハ作去京より出ス書ハ
人ゴ[illegible]久ガ[illegible]ノ心を尽されハ[illegible]ハ末の世ニ[illegible]
[illegible]の都ハ[illegible]ス故名を[illegible]光をつゝむ人ハ多く
又[illegible]ハ身の程ハ[illegible]あるものもあるを見ル[illegible]ハ
大海を[illegible]ノ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ可[illegible]名ハ
御往歌両首ハ[illegible]出来ル今此寒気敬眼病ハ
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]賢ハ

正保二年極月十二日　長頭丸在判

此間二四季の発句二十一句あり

右既言の書并発句ハ旧冬ある方より貞徳老人へ一覧
を受まれ仕別貞徳老人の奥書とも発句の前ハ
書付ハ又ハ[illegible]ハ一句ハ[illegible]の中ハ
褒美の合点也平点ハ[illegible]れ発句ハ除ハ不可有
外見者也

昔正保三丙戌春良辰

五条橋通塩竈町　森九兵衛尉

今句ニ（ツリ）ヨワケタルハ年丁ニ二人三人ヲ出セルナリ今ハ三十一人ナリ

宗甫ハ色紙形三百筆ニテ画ナシ堺ス二此撰集ハ寛文十一年ニシテ宗甫ノ卒年正保四年ヨリハ二十六年後ノ事ナリ其時宗甫ノ色紙ヲ得テ写シ入レタルナルベシ

新百人一句

全一冊 四十九丁 抜萃

但冊ヲワケテ世ニあセシニヤ書籍目録ニ二冊トアリ

谷口重政 万治三年ニ百人一句ヲアラハスソレヨリ十二年メ寛文十一年ニ此集ヲ出セリ

自序 上巻

友千鳥のちよもつゞ語らふが何来て前の百人一句より始て昨日より今日迄の歌をかの川の頼ゝる恨ゝ引あつめとゝこゝて常徳院殿の新百人一首のあり引出ゝ中略 ホ時寛文十一年の始。春山の梢を筆ゝ跡ゝ谷口氏重政自序ス

巻中 発句 皆自筆也 各画アリ今句ハカリヲ抜

こゝろゝ打やゝ多神代のゆゝ打 風鈴軒

冬ゝ今多多ゝ多ゝ多ゝ多ゝ多ゝ 宗甫

長久ゝ和ゝ代ゝ太平ゝ今多ゝ多ゝ 林

藻魚蕃蔵

宴眠 色紙形
満足 筆画
嘉隆 筆画
政延 色紙形
龍吟 筆画
楊加子 筆画
碧梧 色紙形
武珍 筆画
無禅 筆画
瀧川 信加住
瀧川子

文月やいとの紫をつちとして　宴眠
さゝらなみをつゝる糸緒乃　菖柳　満足
花さうかくの匂とくもゞ　嘉隆
空の海を西く月のふなゆゑ大海乃　政延
風達い佛も人も同座ゝ　龍吟
今宵星陰陽和合　楊加子
さゝの葉花ちらさぬ富士の山　碧梧
月を移すの移移の玉　信加住瀧川　瀧川子
月ちもにまもるいてゆゆ山　無禅
魚取て飲ゝ鶏やゝ宮ゝ　武珍
今夕や実青やゝゆふのゝちゝ色　信加飯田住　晴慰子

好女 筆画
立志 色紙形
山石 筆画
玖也 筆画
保友 口

花ちゝてあゝ行ゝさゝ朝　肥後　一直
つゝゝ雲吾車ゝあゝ駒迎　江戸住　好女
雲雀毛やゝ云井ゝあゝ駒迎　立志
岩角に皆やゝれゝ対迎　西恒
ゝふゝゝ神代のゝも鏡餅　立以
氣ゝゝ山つゝゝ　肥後　一直妻
汐ゝゝや堺ゝ古今和同一　山石
ちゝ社ゝこゝ代の隆ゝ　第典
ゝゝゝゝゝ　玖也
ゝ一空の花人ゝ杉戸陽山　保友
ゝゝゝこん月ゝゝ山風ゝ　良保

可玖 梵益 武清 福富 昌房 清長

家業の移りやすかりしの花　可玖
学ぶうらんとしたるを　梵益
ちりのこるは天知地知る　武清
四方山の雪をつもるかの家　重以
ほとゝぎすきくや寺の庭　信陽飯田　無傳
くるゝもれぬひとりぐらしの作　夏出
やゝいろきそうの羽をぬく文月　信陽飯田　春氏著書屋　離雲軒
散花のあとふりつゝ山まつ胡蝶　信州飯田住　正勝
をしゝ角のたをり一年の春　信州社水郡氏　十二歳　福富
杉をうゑうゑめるやうり物　昌房
鶯なくなる庵や独人の腹ゝう　清長

短　短　短　短　短　短

硯箱の移りやすかりしの濱千鳥　知春
こゝろさの又うゑもるいとゝ桜　長好
つゝ移ていと有ほとゝぎすの花の宮　立弦
後繁ゝるやはるかの柳陰　為紀
ゝ武の羽をとゝちゝ神ゝ　越谷井氏　令冨
ゝをとゝ月ゝ花やゝ歌学の高ゝを　定敬
うけさゝはかゝゝ東桜　春九
ゝゝしゝもつゝゝ袋角　貞篠
まゝ和ゝの庵いゝ人ゝ猫ゝ　月狩氏　友静
山ゝやゝゝゝいゝ花の色　伊藤　如春
ゝのつゝゝ花ゝ同ゝ竹のゝ　宇佐　唐川

短　短　色　春画

三月や鶯なくなる五月雨　田中氏　貞良

月を手にとるおもしろし車井戸　近江住　屑子

鶯鳴や多くて居りもすこし　近江住　久袖

さて雨は月うるんでとうぶくろ　一三子

色好むこうぶくろの第の紋　方女

手をさして一つわれに人の師をゞ　宗隆

銀玉のあるい板屋の雨　重昌

五月雨いつそうきの日ぐれ　川

さわいでは鳴るいめつて　常矩

人間の多れば多い児さくら　俊之

少あくびをふくらさとぶくろ　松田氏　温利

春画　色　春画　春画　色　春画

あさふくるを命いとる日ぐれ　一峯

川をのぼるやのうをの車　温直

釣竿や多てよこ町の人並木　野巴

ひとりとりを西の方　重山

行やしてもうをしつかくれ　一栄子　西蓮

ひとりをんなをくいくいと叫ぶ　嫁し子妻　山人

ぬれるや赤の下てを嫁てし　所後ハ　ちう

床夏の花をさくらをとりし　塵言

さくをれたつ一末いこうル　好ル

角ふらを岸陸の赤花の兄　種寛

ちちをかいるくいの月と花　豊前中津之住人氏　三範

谷風 公家三人水辺ニテ空船ヲ見ノ画ニ小船ニ俵多クツミ菅笠ト玉ヲ画ク

短 色画 月 日 色画

伊勢生麦ノ年ヲ経ルマニ
生ヲ思ヒいう家ヲ つ竹と 年 男 一景
月の鏡うさ ー て冬のれ る 親 行誓
月の前とのんたそこうせ廻し 宮川氏 政由
うたをうたせ ゆ 琴の風 江戸新山氏 親信
日もをつあ ゆ 琴の風 中村 谷風
心有 行 まつ ゆ 草 姫 林元
蚊 行 ゆ 角 好永
美水 ゆ 玉 信房
色の ハ 肥後熊本住山 一重
居 酒 つ 大 ー 々敬
時 ま れ 鏡 馬 山岡 元恕

短 色画 人形 短 短 短 色画

ま ハ 生 ま 郎 ム 来安
惜 ま 落 ま 酒 住 利 賀近
下 ま ま 空 ま 岩田氏 有哉
是 ま 牧 の 内 ま の 姫 江戸坂本 重次
月 彩 ま 有 ー 詠 ま ま 立静
善 画 の ニ ま 競 ま
一 鮮 ま 鳥 の 神 杉 伊勢 梅 方孝
今 一 度 あ ま ー ま 破 お 横 住中吉屋 信元 宗雅
ま 杉 ゆ 世 の ま ま ま 康吉
ゆ ま ま 人 ふ と ま 色 ま ま 小西 存昔
ま 時 ま ま ま ま ま 江州住 和親

藻魚菴蔵

花さそふ嵐の庭の雪ならば　豊實

ちりぬる人を待ぞ来ける　肥後熊本住西村　龍庵

いくとせの花おもかげにおぼえけん　正好

浦富のさくらもちるか花ぞ　石田氏　末琢

風の吹れて過るを花香る　嶺利

多摩川の月やうつれる桜　乗言

手ぶりの時を利する　本西寺　土牛

曳こゝ山ちるさのくる　任口

水の月に花ぞ　暫酔

追加發句　四季五十六句ノ内抜萃

立圃悼ム　重以

うせ世の春日の客花の本

桜さく山の端ふげん色絵ル　工佐将監光起筆ニテ

維舟　人のうつる所

夜波し　杉はたの

元禄ニ　雨後出り松ハ笑うてよ

ふるこを笑ふ　しとなるふなを

雨を　ふるを　いふ　なを　来ル

一ことなるよ

月の扇北斗の星をこうるあり

重吹子　月白露多入れ

山を　ふるを

汲ハ涼一ふる山の井は月の影

うつる　移ハ　ものうつる　ほのうつる

掌矩子行

月ハ　まこと　咸陽ハ　宮　月の出ル

復徳　世間ハ

淀川ハ　ふるを

元禄版　右百人一句ハ谷口氏重以雅士の五つの色を中に古人の句も

あり今の人の作て[illegible]かり 中略 雅生もとより此道のさき人にて
吉長頭丸の[illegible] 下略

元隣

寛文十一辛亥年初春吉日

八尾板行

冨士百句

全一冊六行立十七丁 東潮著

自序全文

冨士禅定に心をこらし懺悔しつゝ[illegible]他の句を
盗まんとせるも[illegible]折[illegible]也
[illegible]句をとりて[illegible]点者を[illegible]
[illegible]手を[illegible]道
[illegible]杖を[illegible]竹の百句と
[illegible]

東潮

巻頭

独吟

冨士詣四の海まで[illegible]

[illegible]不二の四面[illegible]

藻魚菴蔵

富士の雪佛つくりて下向ん

本陣の幕外より春の富士

元禄五申元旦等運

等閑に富士いさかひの元の気

ちらりと見ゆる富士の日和旦かな

未だ雪山のまへの富士も　富士堂

以下五人ノ句各前文アリ全文こ

独吟ノ軸

富士つくりて百よりそなかしけり

路傍のつらさをよりはなし

新しに見る紙縁を

夏の中に杉子をとる　嵐竹　其角

七月十八日東湖の会に於て杉子

の名まへとりおとしけり

一桶の水かへていまもおもひつゝ

魚喰ふ日を思ひ出す　五月雨　東朝

ふりかけ笠や躍ん

左ハ西谷の法師より右のいはひを語し

ひいらぎにそゝぎ交かし

乱世の蕎麦の辛さは覚えけり　峯白

蓼喰ふ嵐に何か東湖の

宮はいふくしみえ

新年の餞粧にかくれ

不二の行衛の浦ハ東湖の扇子　嵐雪

藻魚菴藏

[illegible]

片[illegible]はるとあふぐ[illegible]　素子

不二回行　十五人富士ノ句

涼しさや鯨[illegible]海の[illegible]士　似川

[illegible]一つや風[illegible]たる[illegible]士登り　可陶

不二行の眺さく枯木[illegible]　柳潮

[illegible]絶て一澤不二[illegible]水ぶ　亀毛

是樂　東鵬　一瓶　排知　海沙　白石　嘉心

巳朝　鯨波　東周　李梨

以下五吟歌仙

[illegible]ゝ烏乃果や冨士ノ[illegible]　東潮

波声　光潮　春潮　海星　筆

元禄五申八月上旬　大伊[illegible]志村孫七

藻魚董藏

俳諧移徒抄

全一冊 三十九丁 本文十行立ホノ
連俳用捨七丁八十五行立ナリ

播州龍野僧談佛法者龍乘於雲氣嘯于風之辯論人皆歸仰如今不贅于此平素秀于俳諧行有餘力則以編是播磨米此米可謂精焉朝饔夕飧之德餘於集中只見遯向腹果然矣不侈為此僧之知己元三十年故請序於余不辭而召不韞匱之采沽之哉沽之哉沽之哉沽之哉 未如此 以上

誰御風山春色也

元禄第五壬申春正月日

一時軒

藻魚蕓籸

自筆

昔し叔一舞りて竈一人の舞りをなすはなと
雖一今は佛諧の雜躰を屯をて移徙抄とらふ
うる根さ一を洛都の好士太郎を産て太上皇と
名付次を柱立と呼猶其餘縁を駈く自う此書に
烏帽子着せるるにたるめ播州御風山叙
元禄壬申孟春之日

移徙抄

手仁於葉

此条七丁まにをそれるる今用ふられ難ス

執筆法要

一先上下を着一文臺に分をし扨懐紙を上にて折て
文臺にをるを也硯を上へをるをふられ第三を出
来る内ハ賦をたをり書て待也第三出来て後賦物
を取るり賦の字一字を三度墨を次て書へをる也
一賦物を事一宝何是ハ上賦一云也何餘ハ
下賦をる也此外一字露顕をハ花を富二字五音
をる月を孤三字中略をハ椿を月四字上下略
をハ鶯を梅を取るり是ハ千句の時入事也百韻
懐帋ハ不入事也懐紙の右一書ハ元禄四年
未の九月日を書るるる
一懐帋を之時ハ左の手に懐紙を打右の手に

筆を持添て吟ずる也一座れ内筆を放さあるべ
し實名れつまりのやうに懷紙を書へし也発
句挙句ハ二度吟ずべし追善嗣禮の会曽ては
一度なり
一執筆の大事あり貴人兒女中ふとつまれく
なるべし句ハ指合されべく所会しれ五句七
句去物も一句やふと近き去物ハ便宜会
あるべ句を付べ柏ものなれ共ては
指合るべ句を付て後ろ会べ
一雪月花四季山類水多食物多ハ字ふて書
会一指合見紙ハ也懷紙まて年まて月の

句花れ句ハ内ハ此中会
一吟ずべ会一前句高ずべ也ずべ
調子可和計事
一貴人堪能の御名筆て何会一當座に
者を扣ハ不何事にも也
一執筆ハ人ハ筆て新式御筆とよく見る
会べ
一執筆拔書せあ内ハ脇の人ハ句を吟ずあ
べ
一祈禱法樂移徒ふと其會ては禁句多ハ

深魚蓮藏

執筆四隅ゆてうへよる事

一花は吉野　月は姨捨　桜は龍田　萩は宮城野等の名所なる故に連俳共なつまし

西く朱とりまぜる也

一硯の蓋は取やうに墨の拭紙筆の点し

なをし色帋短冊おすやうに等和歌一座の作法口決之事

於會席は五禁

一雑句之事　一禁句之事

一高雑談　一座乱之事

一高吟　一大呻吟之事

一大食大酒　一座數細に立事

一分句をくく出しく執筆に被問事

一為歴座月花の句を好て分る事

一人の句を出す時俳諧の人にさゝやく事

一一句の句に上手案元時初心なりを分る事

一亭主にて席を急く事

一冬用の食物細く出る事

一人の句を出す時出合はしく余句を考ふる事

一景を催す事

一禮は始終二度ふゝ一殊る出家の時亘不似合事

藻魚蕃藏

一人の出し句を脇へもちゝ直す事

一其人体に不似合句を度〻出す事

一執筆を越て脇へ指合へる

一我句を人の不好内へ座席を立まゝさせる

一居所いうて生類いろ〻問まゝ是

一我句を度〻吟ずる事

一句を出しかけて主を直す事

右之條〻先輩所被定置用来者也

此外十条迄抔と云事一も無之

俳諧濱萩

謡曲ニ作リテフシ付ヲシタリ

衣替や竹田の船路芋泊月松挑七句去一

と連歌は定る上は此詞をいふ五句さゝ同字

神風野山道雲水暮夜日浦波三句潮を

ふまと名山類水辺名所花紅神祇釋教旅

まと同一く三句をつゞけ三句続く

草と草鳥と名る獸と獸同一時分の其間

衣類と衣類虫と虫木と木といふ三句去つゝけ

ていふ三句まで三句に及ぶ事なし天象は月

日星津物は雨雪霜雪已縫ふ雲

霞霧煙抽物は草木竹人倫と人倫名

所と名所国の名生類に鳥と虫魚獣の間
より朝時夕夕時夕食物と食物熟食と雲霞
うくひすとれ其名とれ皆二句去と二句て久
春秋の季に三句より五句まてつけく二句
よてに捨ものも夏冬に二句より三句とてて久
恋一戀の句に三句より一句まてに捨ましし
二句より五句にいたる全一面八句まてる
に神祇釋教哀傷同字述懷四名所古人
の名せるらいけす數島の道廣く濱のまた
せ數こにそ品に移るそ連俳を雜くく
餘にふるくくこそ全一

假名法式

九八丁埒モナキフナリ

俳諧本式目

一面十句　発句の賦物と合て也全一
面ゝ名所ともも也全一
名所と名所に中五句去一
一季に五句さたる全一
他の季句くくも全一
一景物双てこ句まくくに打越も同前
一月花松船夢泪竹烟
右十句さたる全一

藻魚菴蔵

一清物と云とも物打越蟬丸

一聳物　同前

一草水　同前

一時鳥　霞時覚　景物に用之

一槙檜草刈　猿岩　右山類に用之

一李は二句ゆゑ捨面

一花八本桜四本也

一花と桜同面ゆゑ

面ゆゑ花裏に桜と花と云色

一名残裏　六句也

白しのゆゑ花ゆゑ名残面

此花夏秋冬の花を云ふ也　春の花の時い名残の表の花他の季の花也

此外應安新式のゆゑ　明應元年に改之

連歌の式を以俳諧も同前

地俳諧ゆゑ

古代中古まて其一句の体を見て具体ゆゑ寄句作りあしらふ事ゆゑ俳道の本意也

男女の中は秋風

芭蕉翁は世帯砕りの氣色ゆゑ

男女と体ゆゑ世帯と付秋風と芭蕉と付体

藻魚菴蔵

[illegible]是古代の俳風なり

板の小笠に硯手[illegible]

[illegible]年入初[illegible]意の山

是中古は分寄は句作也光本教取ふう

意の山とふくてあるし五文字なり形人の句は

[illegible]是もをあるとい[illegible]雅し入むこの山

ふ[illegible]云掛いむ[illegible]俳諧なるし

男の[illegible]なる碓[illegible]

門口の札[illegible]おる[illegible]

是當流[illegible]心行の付[illegible]第一[illegible]元

俳諧と教道の一体なれい碓の術[illegible]意味と秋の

風情なるあ[illegible]中は[illegible]体[illegible]付

[illegible]三句目[illegible]俳諧のうえ[illegible]也

一思[illegible]具[illegible]捨[illegible]付[illegible]

當流の姿也尤此付句つ[illegible]一女孔別と

[illegible]後夫は恨[illegible]ありて孔四[illegible]

[illegible]俳[illegible]所[illegible]

[illegible]俳諧當流の姿[illegible]秋の花野の[illegible]

[illegible]中に[illegible]れ猶硯[illegible]捨[illegible]

花車に[illegible]合と第一は好[illegible]也又糸桜

[illegible]牧[illegible]鹿子の小袖掛[illegible]

[illegible]俳[illegible]

此句の俳諧連歌に陪する事はいく元連俳の
とうちたる也

松の風秋の寿命を俳し

うやうに一句を連歌とは文字をあつかふ
沙汰し付る所を俳也俳諧とは下品なる
ちし一句のつゝく所いやしくして俳言正しく俳
諧の仕立をもつて俳諧師也又つよく仕立
樫木原に猿の鳴声

節季なれば雪乃口鼻
ゝつ偏火吹ちゝもるゝ
此句ゝゝ俳諧のまことゝ也自然茅句一日千句也

一二分ちゝの仕立也懐紙と名を書る句ゝあゝ
鬢の花ゝけと長ゝせ
ゝ道朝鳥むらい下ふゝ
此句正風の分ゝゝ中古當流をうゝ俳諧
ゝゝゝゝ
△趣して分句に見合ゝ引ほい意味時節
を分ゝゝ本意也ゝゝ
紅葉に
鹿を分ゝ見合嵐と分ゝのゝ師章車
分ゝ嵐ゝ女の物ゝふゝ分ゝ意味也
「風吹雨」秋の景ふゝ分ゝ時節ゝ此句節の

[illegible]

一葉ちるを菊雁ふと行るは非道也近年の俳
諧とうは[illegible]の行合[illegible]功者のく子
ゆ[illegible]るあり

當流俳諧と[illegible]近年の作者世を連くに先計
[illegible]ぬ[illegible]色さ[illegible]ぬ[illegible]白作
[illegible]は巧者に[illegible]て式の吟味[illegible]
[illegible]の明[illegible]也古代の執行は掟の書
物眼をさし敬道入く自然と具德[illegible]

[illegible]者[illegible]あり今時は宗匠[illegible]高人[illegible]
[illegible]書[illegible]耳学問計りてつ[illegible]
[illegible]は耳取て鼻うおう名所も同國
[illegible]十日路も[illegible]所を行合[illegible]
[illegible]俳諧名所は俳諧名所と連歌名所も
連歌名所を行[illegible]也水辺山類等も其
[illegible]行合[illegible]と先師の作
おく[illegible]也

俳諧発句のとし西山梅翁十五年以前の歳旦に
[illegible]命の世[illegible]

藻魚蓋藏

そうよそよ昨日の風体一夜の妻　梅翁

高名の言の葉あんせいとく一句ぬけとそのこゝろ

をいそがしく仕立又ふるに見立の句作あるべい

幽美体其後ハ乳色をそやし是以誰そゝめを

そとまわるゝ自然と諸国をにその

氣をあそもてあそぶ行雲流水とゝる中ゝ世の

ゝ世に第ゝ爰ゝと世ゝ沙汰をゝるゝ句ゝ

ゝ爰ゝ書分ける白所の吹寄不同

又そ凡人祇園清水花ゝ妻　江戸　季吟

吹爰ゝ堤の居ふゝる柳ゝ　同　芭蕉

子規〳〵ゝそそ初ゝゝ　同　調和

鶏呼ゝ出暁をほゝゝゝ　同　其角

鴻の足見〳〵ゝ長ゝ枯野山　大坂　遠舟

春日路の言ゝゝゝ名所金那佛　京　如泉

時雨初黒木ゝ成ゝ何と於　大坂　才磨

名月ゝ部ゝ何を書白浪　京　言水

花宇ゝ供の女にの中ゝゝ　大坂　由平

常陸ゝとゝゝゝ初時ゝ　伊丹　宗丹

五月女のゝゝゝゝゝゝ高ゝゝ　大坂　来山

若菜摘婦のゝゝ地蔵ゝ　摂津　西吟

秋ゝ松外の浦ゝゝ夜鳴貝　江戸　拳白

郭なりなり風の芭蕉かな　同　一晶
今さかり桜もさそ潮干かな　美濃　木因
名ぐはしや咲まれり山さくら　京　信徳
深山辺や蝶を追ひて居合ぬき　同　團水
牛の尾をふりてあらそふ胡蝶かな　伊勢　一有
扇白し野時鳥はなめらか　大坂　万海
来る秋や風立水の澄所　河内　律友
名月を見て夜もの名をささぬかな　京　我黒
人とりて菖蒲を宿のあやめ草　大坂　轍士
馴れたるは暖なり細代かな　京　和及
見よよるん堤牛引天の川　江戸　湖春

八九月風ふくころの蝶の貝　同　嵐雪
でとしは桃かれは柳の節句かな　京　方山
竿持ス梅も柳に年の暮　大坂　西鶴

右紙数三十丁本文十九丁

連誹用捨

此七丁ハ追加ニヤ字面十五丁ニ三丁書風モ本文ト違ヘリ又誹ノ字モ本文ハ俳ヲカキ此ハ誹ニツクレリ

連歌俳諧の差別を連俳両用の分ちあり宜しく混ぜざる物也

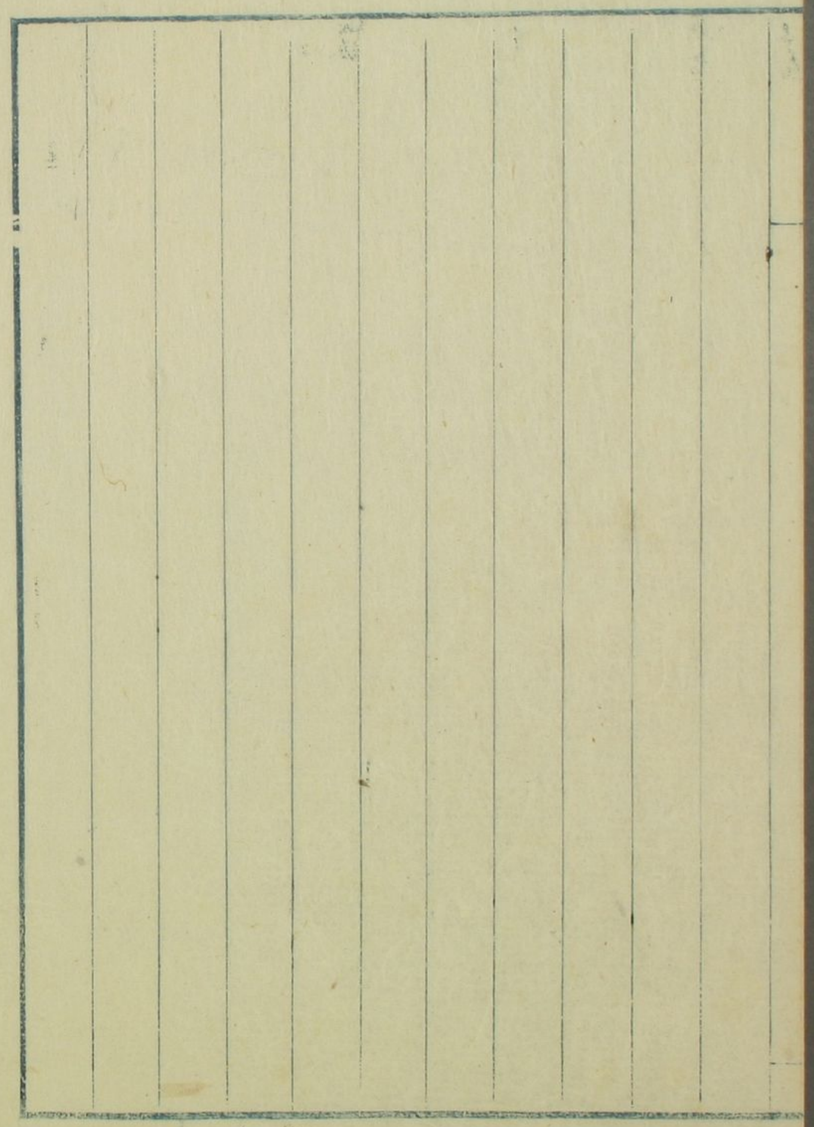
右連誹並に用捨の三つの品を分るといへど朧花おぼろ月花の雲花の雪なども無き連の詞なれば朧月夜花の白雪花の春雪などにて社宗の連歌にはみな〳〵と或秘事にて付られ必然一部に泥てよろし
うち紙の足くなりてはみなまして也しかしながら切師

藻魚庵蔵

とあるて於くるべし終

十方八方幡磨り林言葉の林をくりの柱立ハ番匠童子の
墨壺さーうねを筆人の名ゝ色ゝ彩ゝ人の目論ハ角水之
ゝ是皆俳諧師の日ゝ故也古人ゝ三ゝの名歌とゝ
鉄鎚論鋸屑の句帳ゝ其時世の物當流の作事ゝと打木
を白土ゝ塗隠ゝ面向ゝらに花ゝ實ゝるゝハ何ゝ詮ゝし
地突ゝ改め棟梁の枝ゝとゝ成ゝ時に
御風山春色此一冊成就ゝ移徙祝と題ス是俳道
ゝ入門口初心のゝもゝ
世帯渡さゝ似ゝ

元禄五申歳初春　難波俳林　二万翁　松寿　白文

大坂高麗橋真鍋橋節南入町　金屋庄兵衛　板

藻魚蕓藻